（２６）楡の会発達研究センター報告、その２６（2012 年１月）

2 歳前から乱暴が目に余ったが“好い事作り心理療法”によって 4 歳には落ち着いて良い子になった男児

楡の会こどもクリニック
石川　丹

要旨

1 歳半から多動性が顕著で攻撃行動が目立った男児に対して、ごっこ遊び意識、成り切り意識、心的外在化を促す心理療法、即ち“好い事作り心理療法”を施行した。母親は心理療法の意味をよく理解して児に対して上手に実践できたため、児は自己の対象化と自己説得の発達を獲得すると共に攻撃性が消失し、仲間との友好的社会的行動を取れるように成った。

はじめに

社会心理学によれば攻撃行動は二つに分類される[1)]。一つは反応的攻撃と言い、妨害されてやりたいことが出来ない時に怒り情動を伴って出現する反撃的攻撃である。もう一つは道具的攻撃と言い、金品や地位などを獲得しようとして攻撃行動を道具として使う場合である。この二つの攻撃行動はいずれも欲求を守ったり利を得るための手段としての攻撃であるが、子どもの場合には第三の攻撃行動がある。それは攻撃その物が目的である場合で、何の恨みも野心も無しに攻撃する目的的攻撃である。

本稿では、1 歳半過ぎから目的的攻撃行動を呈した幼児の治療過程を報告する。

児童

初診時 2 歳 4 ヵ月の男児

主訴：1 歳半の頃から、じっとしていない、衝動的、面白い物を見つけると突進して行くので人にぶつかる、迷子になる、かんしゃくを起こす。「試合」と言って傍に居る人にキック、パンチ、頭突き、体当たりする。長い物があると「武器」と言ってバシバシ振り回し、この半年間で週 2 回は人に怪我をさせて来た。しつこい一方飽き易く変わり身が早い、人の物を直ぐ奪う。鬼、お化け、鰐、怪獣、宇宙人など怖いもの系が大好き。爪噛みがある。急に眠くなったり、急に疲れる。

現症：ウルトラマンごっこをする、「えっ、誰も居ない」「こん中に入ってる」「お腹空いたから御飯食べないでおやついっぱい食べる」「～みたい」（比喩）等を発し象徴行動は健康発達である。「シェンシェイ（先生）」などｓがʃになる音韻未熟がある。

既往歴：妊娠中に中毒症、切迫早産があった。在胎 33 週、帝王切開、出生時体重 1892ｇ、仮死（＋）。這い這いせずに 1 歳には独歩した。後追い、人見知りはなかった。寝付きは悪く、毛布っ子だった。乳児期から夜泣きが月に 2 回あり、最近は「だめだよ」「やだー」と文句を言って、コテンとまた眠る。

家族歴：母 42 歳、エステティックサロン経営。24 歳の姉が一人。父は継母に育てられ子どもの頃には狂暴性があり小学校の間は施設に入っていた、42 歳で自殺した。

母への精神療法：ストレスをストレスと感じ易い敏感な子、我が強いため他者に否定されていると思っちゃう度合いの強い子だから我が通らないとすぐ怒る、と説明し、図星を言う、「だめ」→「～しよう」の声掛け、OK の声掛け、二つ先のアナウンス、など“好い事作り心理療法”（後述）を教示した。乱暴は自己説得が可能になる 4 歳頃までは続くだろうから頑張って通院して下さい、と見通しを説明して励ました。

経過

2 歳 5 ヵ月；この子に対する注意がすごく多かったことに気付いたので、1 日に 1 回は

好きな事を好きなだけやらせるようにした。アイスクリーム食べたいと言い出した時「～したらね」と言ったら、しぶしぶ応じたのでびっくりした。暴力的になるのは変らない。

2 歳 6 ヵ月；新 K 式発達指数（DQ）は 107（姿勢運動 DQ94、認知適応 DQ97、言語社会 DQ120）と言語性の知恵が勝っていたので、これを以下のように母に説明した。今は口より先に手が出るのが早いが、言葉が進歩して思っている事を適確に言語化できるようになれば、行動でストレスを発散している今の発達段階から言葉でもってストレスを発散できる段階に発達して、乱暴行為が無くなるだろう、と。

2 歳 7 ヵ月；手が出る前に一瞬考えているよう見えるようになったので、母が「お口で言うのは良い事だよ」と言い聞かせていたら、「バシン（パンチ）するからね」と言ってから叩きに行くようになった。誰彼構わずどつくのは減ったが、小さい子にはする。

「ターちゃん（本児の愛称）は優しいお兄ちゃんだからバシンしないよ」と母が言うと叩かないこともあるとのこと。本児のこの行動から本児には“優しい行動をしなくちゃ”という規範意識が有ると解釈でき、これは乱暴行動が消失する事が大いに期待されることを意味した。

2 歳 8 ヵ月；児童デイサービスでは攻撃行動は減った。戦いごっこ中に興奮して本気モードになると母を叩きに来るとのことで、そういう場合は「ごっこだよ、嘘っこだから、手加減ね」と声掛けするようにと指導した。赤ちゃんを「可愛いね」と母が言うと「可愛くない、バシする」と言う。譲ってくれる子にはどつくのが少なくなった。「俺の、俺の」と盛んに言い、「みんなの物も俺の物」と言う。母の判断では問題行動は初診時を 10 とすると 7 に減った。

2 歳 9 ヵ月；デイサービスの先生に手加減をするようになったと言われた。本児よりもっと手が出る子が入って来て、やられて嫌だと思うようになったようだ、と。でも、新しい子にはやっぱり攻撃し、他児を叩きたくなると「武器ないの？」と母に聞いて来る事もある。待合室で他児をどつくので「石川先生に言うよ」と言うと、「ダメダメ」と言いながらそれ以上しないことがある。母が児が好んでいる物を指して「これ好きだもんね」と言うと、わざと反対に「嫌い」と言うことがある。反対言葉は幼児期には必ず出現して来る言葉遊びの一種だから、ギャグだと思って冗談のように仕立てるのが良いと指導した。

2 歳 10 ヵ月；事件は週に 1 ～2 回はある。ベッドに寝ている赤ちゃんを見つけ、ベッドによじ登って「赤ちゃんベチする」と言って叩いた。「どうして叩くの？」と問うと「可愛くないから」と言った。そういう時は児に「優しくベチしようね、撫で撫でしようね」と声掛けするように指導した。「オレの」と言っておもちゃの取り合いになって相手の顔に爪を立てて血だらけにしてしまった。戦いごっこでは役を仕切るようになった。これは象徴行動の発達が順調である事を示唆していて好ましい事である。物を持って顔を目掛けて来るが、「危ないよ」と言うと止められることもある。

2 歳 11 ヵ月；児が赤ちゃんを見た時、母が空かさず「優しく撫で撫でしようね」と声掛けたら、児は「やだ、ベチする」と言ってやろうとしたので、母が更に「すっごく優しくベチベチしようね」と言うと、赤ちゃんを撫でることが出来た。母はダメを言わないで「～しようね」と言うが、注意されてると思うらしく「ママ嫌い」と言う。本物の包丁を使って遊びたがったが、自分の指を切ってからは本物は使いたがらなくなった。母は 1 年前に比べれば、大分落ち着いて来たと回想した。

3 歳 0 ヵ月；デイサービスに新しく来た行儀の悪い子を攻撃する。理由を母が質すと「座ってないから」と言うので、「叩かないで、お口で言ってね」と母が言うと「うん」と返事することもある。行儀の悪い子に手が出るのは本人からすれば先生のお使いをしている事になると母に説明した。母が猫撫で声で大げさに「～しようね」と言うと、母にチューしたり、プレゼントと言って何か持って来てくれる。窓際に上がった時、怒らないでわざと優しくしたら、飛び降りないで椅子を伝って降りて来て、煽てに乗るようになった。お絵描きが好きになったが、顔を描く時は必ず鼻血を描く。

3 歳 2 ヵ月；攻撃は半分に減って、加減も可能になったが、その場で攻撃せずに後で仕返しすることもある。攻撃行動を時間的に後に実行できるように成ったのは発達的には好ましい事である事、つまり“江戸の敵を長崎で討つ”という諺に象徴される智恵が付いた事を母に説明し、期待される次の発達段階に相当する“成り切り遊び”を促す方法を指導

した。感情を言葉に出来るのが増えて来たとのことなので、言葉で溜飲を下げられるようになることを促す方法も指導した。

3 歳 3 ヵ月；幼稚園の体験入園の時、どついて 3 人泣かせた。 姉にキックするので「優しいターちゃんにならないと、おっかないお姉ちゃんになるよ」と姉が言うと「おっかないお姉ちゃんにならないで」と言って甘えた。他児を叩いた後にハッとして「やっちゃったあ」という感じの表情をした。母に「ベチして良い？」と聞いてから叩こうとしたので母が否定したら、しなかった。「優しいターちゃんに成ってね」と母が言ったら「優しいターちゃんはお腹の中で眠ってる」と言い訳した。見事な“心的外在化”（後述）である事を母に説明した。相手によっては優しく接することもある。

3 歳 5 ヵ月；乱暴は初診時を 10 とすると 2 に減ったと母は述べた。いつもトラブルになってた子と仲良く成れて、その子を「可愛いから好き」と言い出した。叱ると「～だから～したんだ」と理由を言うようになった。力が入ってしまった時は「ごめん、優しくやるんだよね」と反省するとの事で、乱暴行為の近々の消失が期待された。字を書くようになった。

3 歳 8 ヵ月；「僕夢を見た、怪獣やっつけた、鬼も出て来た、毒飲ませて殺した」とか言う。過激な事を空想の中に閉じ込められるようになったので良い事と母を励ました。いけない事をした時「赤ちゃんがしたんだ。僕、猫の赤ちゃんに変身したんだ」と独り言を言っていたので、母が「そうなんだ、赤ちゃんがやったんだ、ターちゃん猫になったんだ」と言うと「ママも猫になって」と甘えて来た。「悪い心に変身したんだよ、もう良い心に成るから」と言ったこともある。再度“心的外在化”の意義を説明したところ、母は「そう言えば二重人格のように見えることがある」と呟いた。手が出るのは 10 が 1 になった、先生の言った通り 4 歳になって落ち着いた、と母は述べた。

4 歳 0 ヵ月；就園（3 年保育）して 1 ヶ月半経つが、他児を叩くのは無く、むしろ譲る。ギュッと顔をしかめる、とのことで、チックの心理機序を母に説明したところ、葛藤しているのが分かる、幼稚園で誰かにやられて我慢しているのも分かる、とのこと。涙を浮かべられるようになって「泣いて良いよ」と言うと泣く。

4 歳 3 ヵ月；小柄な子には優しくして上げられる。他児にやられても反撃しないで我慢できる。自転車の補助輪を取ってくれと言ったので、取ったら乗れなくて悔しがり、翌朝「僕、夢の中で乗れたよ」と言った。「ほんとだよ」とか「うそんこだよ」とか言って戦いごっこで手加減出来る。「なんちゃって」とかわざと面白い事を言ったり、替え歌をおどけながら歌って自分で受けてテンション上がってゲラゲラ笑ったりするようになった。

5 歳 6 ヵ月：乱暴行為は全く無く、心配は全然無いとの事。

考察

本児の攻撃行動は反応的攻撃と道具的攻撃に加えて、挨拶代わりに叩く、あるいは先生に代って注意したつもりで叩く、など目的的攻撃が顕著であった[2)]。

本児の目的的攻撃行動の要因の一つには元気活発、衝動的、自己中心的などの性格要因があり、これは父親からの遺伝とも考えられたが、父の場合は継母との確執が窺え、確執という環境因が狂暴性を小学校高学年まで持続させた可能性もある。本児の場合は、母親が筆者の指導に則って上手に関わることによって性格要因を抑制し、父より早期に他者と友好的関係を持てるように育てることが出来た。

初診時に筆者が乱暴は 4 歳頃まで続くだろうと母親に見通しを説明した根拠は、本児には知的遅れは無いと判断されたため、自己の対象化と自己説得（我慢）が可能になるのは 4 歳頃と予想できたからである[3)]。

筆者による母親へのカウンセリング内容の重点は、ごっこ遊びにおける“成り切り意識”と自己の一部を外側に置く思考つまり“心的外在化”[4)]の発達の促進であった。この二つを母親が児を上手く煽てる事によって順調に発達させる事が出来たからこそ攻撃行動を消失させる事ができたのである。

成り切り意識は自分を他者に見立てる意識であり、例えば、仮面ライダーフォーゼになったふりをして戦いごっこをしている時、“自分はフォーゼに成ってフォーゼらしく演じているのだ”という意識である。言わば演技意識で、この演技意識はやがて本音を抑制し

建前で行動する自己制御と自己説得（我慢）の発達を促すことになる。
心的外在化も自己の対象化と他者視点を促す。本児の場合、母親に注意された時「優しいターちゃんはお腹の中で眠ってる」「赤ちゃんに成った」「悪い子に成った」など言い訳した事が心的外在化に相当する。
次に、母親に対して指導した、図星を言う、「だめ」→「～しよう」の声掛け、OK の声掛け、二つ先のアナウンス、の意義を以下に説明する。
１）図星を言う
癇癪を起こして怒っている子を鎮静するために、大人が怒っている子の気持ちを代弁して言語化して語り掛けると、子どもは自分の気持ちを大人が理解していることが分かり、“分かってもらえてる感”が醸成され、また、自分を対象化することができて、怒り情動が鎮静化する。
２）駄目→～しよう
ダメと言われる経験の多い子は、ダメを言われた時「また、ダメって言うんかい」という気持ちと共に怒り情動が発生する。我の強い子はやりたい行動を阻止されるとますますやりたい気持ちが亢じる。怒りと意欲が大きくなると行動が激しくなり、親からすれば手が付けられない状態になる。だから、ダメを言わない事が肝要になる。「～しよう」と子どもの興味を引く声掛けをし、子どもがそっちをやってみようという気持ちになれば、怒り情動は生じなくなる。
３）OK の声掛け
癇の強い子はダメを言われる機会が多く、褒められ経験が少ない。子どもがいつも出来ていることをしたら「OK、それで良い、またやろう」と声掛けすると、子どもは認められたことがうれしくなり褒められたことと同じになる。大人からすれば褒めるほどの事でもない時に「OK」を言うと、”褒め上手”に成ったことになる。
４）二つ先のアナウンス
落ち着き無い子は衝動的に映るがその心的過程は刺激閾値の低さと捉えられる。誰でも行動予定の有無によって新しい刺激に対する閾値は変わる。だから、子どもに対しても事前に行動予定を伝えて置けば想定外の刺激に対する閾値は下がる。幼児の場合は記憶容量が少ないので、四つ五つを一遍に伝えると初めの一つ二つは飛んでしまう。だから、二つ先の行動予定のみを逐次的に順次伝えるのが良い。子どもと行動を共にする時には日常的にアナウンスし、一つでもアナウンス通りにしたら褒めて置く。そうすると徐々に親のアナウンスに従う回数が増える。

引用文献
１）石川　丹：攻撃行動の心理発達．小児科臨床 61:52-58,2008
２）石川　丹：境界例児童－癇が強く気紛れで攻撃的な子－．小児科臨床 61：59 - 65, 2008
３）石川　丹：反抗期の心理発達．小児科臨床 61;866-872,2008
４）石川　丹：“好い事作り”療法－困っている子と親への発達カウンセリング－．小児科臨床 61:2055-2061,2008